

創世記39章21節 「異国でも共におられる主」

1A 遣わされた者への約束

1B モーセ

2B ダビデ

3B 弟子たち

1C 主ご自身

2C パウロ

2A 証しの力

1B 世にしながら神のもの

1C 異教の支配

2C キリストの勝利

2B 世にある試み

1C 兄弟からの反対

2C 罪への誘惑

3C 不正や中傷

4C 落胆

3B 世への勝利

1C 罪からの守り

2C 良いご計画

3C 苦しみにおける勝利

4C 将来の栄光

本文

創世記 39 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 38 章まで来ました。午後礼拝で一節ずつ学びますが、今朝は、39 章 21 節にある言葉に注目します。「しかし、主はヨセフとともにおられ、彼に恵みを施し、監獄の長の心にかなうようにされた。」

もし、みなさんが「主がここにおられる！」と分かるような時や場所は、どこですか？と尋ねられたとします。どこでしょうか？教会であったり、クリスチャンの友人と一緒にいる時、賛美している時など、いろいろかと思えます。あるいは、ハワイのような、至福の時を味わっていると、「まるで天国みたいだ」みたいに表現することもあるでしょう。

しかし、39 章は三度も、「主がヨセフとともにおられる」と言いながら、そこは、私たちが想像するようなところとは、裏腹の場所で、そうであると書かれているのです。「39:2-3 主がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。3 彼の主人は、主が彼

とともにおられ、主が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。」そして、今、読んだ 21 節です。38 章を読んだのであれば、お分かりですが、ヨセフは兄たちに奴隷としてエジプトに売られたのです。まだ 17 歳です。全く異国の地であり、習慣も文化も見知らぬところであり、そもそも奴隷として売られているのです。その中で、主がヨセフとともにおられた、とあります。しかも、21 節は、ヨセフが監獄に入れられてからの話です。そこで主がヨセフと共におられました。

1A 遣わされた者への約束

ですから、私たちは、主が共におられるという約束の意味合いを、相当、変えていかなければいけない、聖書に書かれてあるとおりの約束の理解を得なければいけないことが分かります。私は、信仰をもって間もない時に、「聖書の約束のことば」として、何か励ましになることばの冊子のようにしてまとめられているのを、目にすることがあります。そこに、「孤独な時」に読むとよい約束として、マタイによる福音書の最後にある、主のことばがありました。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。(28:20b)」どんなに自分が独りぼっちであっても、主がそこにおられるのだという慰めを得ました。

けれども、ずっとずっと後になり、私たちが海外へ宣教師として日本を離れた時に、同じ箇所を読み直しました。すると、そのイエスの約束は、独りぼっちの時に慰めてくれる約束ではなく、まさに宣教の働きの時の約束だったことに気づいたのです。「マタイ 28:19-20 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、20 わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

そして事実、私たちが出て行って、福音を伝え、その若者たちをキリストの弟子にしていく時、イエス様がそこにおられるという確信が強く与えられました。日本とはまるで違う環境です。文化や言語はもちろん、制度も違いますし、お世辞にも聖書的、キリスト教的ではありません。けれども、そこには主がおられるということが、はっきりとわかりました！

聖書を見ていくと、主が、「わたしは、あなたと共にいる」と約束されるのは、どこかに遣わす時です。ヨセフは、後に、エジプトの宰相となってから兄たちに自分を明かして、こう言いました。「45:5b 神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。」神が、自分をエジプトに先に遣わしたのだと、彼は言います。

そうです、主が、ご自分を証しするために、人を用いる時、どこか他のところに遣わす時に、「わたしは、あなたと共にいる」と言われます。いわば、宣教の働きのための約束です。

1B モーセ

八十歳になったモーセは、荒野でミティアン人やイロに仕え、羊飼いをしていました。ホレブの山

に行った時、柴が燃えているのに燃え尽きていないところに行ったら、そこに主がおられました。そして主が、「あなたをファラオのもとに遣わす。わたしの民、イスラエルの子らをエジプトから導き出せ。(出エ 3:10)」と命じられました。しかし、モーセは、「私は、いったい何者なのでしょう」と言いました。当時の超大国の王のところに、名もなき一介の羊飼いがそんな大それたことができましようか、ということです。すると主は言われました、「3:12 わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしが、あなたを遣わすのだ。」

その後も、主は、モーセの死後、ヨシュアが約束の地に入る時には、「わたしはモーセとともにいたように、あなたとともにいる。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。(ヨシュア 1:15)」と言われました。士師ギデオンに対しても、ミディアン人と戦うように命じられた時、御使いが言いました。「力ある勇士よ。主があなたとともにおられる。(士師 6:12)」

2B ダビデ

モーセの次に、主が特別に選ばれたしもべ、ダビデにも、同じ約束がありました。ダビデが、ゴリヤテと戦って、大勝利を収めました。その後、サウルはダビデを自分に仕える、しもべにしました。サムエル記第一 18 章は、ちょうど、創世記 39 章のようです。「主が彼とともにおられたので、ダビデは、行くところどこでも勝利を収めた。(18:14)」とあります。

ヨセフに、主がともにおられて、それで成功を収め、ヨセフが仕える主人は、自分のすべてのものを管理させるようにされ、その家は祝福されましたね。ポティファルの家でそうでしたし、監獄に入っても、監獄の長にも好意をもたれました。同じようにして、エジプトのファラオも彼を重用し、エジプトの国全体が栄えたのです。同じように、ダビデは、どこにいても、ペリシテ人との戦いで勝利を収めました。主ご自身が、イスラエルがご自身を神として、その国が強く、栄えて、平和を享受するように願っておられましたが、主がその目的のためにダビデを用いられました。

3B 弟子たち

そして、先ほど言及しました、大宣教命令に、同じ約束をイエスが弟子たちに与えられたのです。(マタイ 28:19-20) アブラハムへの祝福が、ご自身によってすべての国々に与えられるのですが、彼らを用いて、実現していかれようとして、それで、「わたしは、世の終わりまであなたがたと共にいる。」と言われたのです。彼らは、エルサレムからしたら片田舎のガリラヤ出身の名も無き者たちです。ところが、とんでもない大きな使命が与えられました。しかし、わたしがともにいると言われて、事実、彼らの働きで、今、世界中に、キリストにある祝福が広がっています。

1C 主ご自身

主イエスご自身が、遣わされた方でした。ヘブル書では、「使徒」と呼ばれています(3:1)。使徒と訳されているのは、「遣わされた者」という意味です。それもそのはず、弟子たちを遣わしているのは、主ご自身が父なる神から遣わされたように、同じようにして遣わしているからです。「ヨハ 20:21

平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」そして、息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言われました(22 節)。御父がイエスを遣わされたので、イエスに神は共におられました。ペテロが証言しています。「使 10:38 神はこのイエスに聖霊と力によって油を注がれました。イエスは巡り歩いて良いわざを行い、悪魔に虐げられている人たちをみな癒やされました。それは神がイエスとともにおられたからです。」

2C パウロ

後に、よみがえられた主イエスに出会い、それで使徒となったパウロですが、彼が難局にいる時に、主が共にいることを現わしておられました。コリントで、彼は「弱く、恐れおののいて」いたと手紙の中で言っていました(Ⅰコリ 2:3)、主が夜の幻で励ましておられます。「使 18:9b-10 恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。10 わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

そして、エルサレムに戻ったら大騒動が起こって、死にかけましたが、夜に主がパウロのそばに立っていたことが書かれています(使徒 23:11)、囚人としてローマへの船に乗っていた時、遭難しそうになりましたが、神の御使いがそばに立って、だれ一人死なないことを約束しています(27:23)。そして、彼がローマ皇帝によって死刑にされる直前に、いろいろな働き人がパウロを見捨ててしまいましたが、「しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。(Ⅱテモ 4:17)」とあります。すべて、彼にとっては暗闇の中にいた時です。そこに主がおられました。

大事なものは、すべてにおいて、パウロが、福音を宣べ伝える時に、そのような闇の中に入り、それでも主がおられたということです。今、読んだ、Ⅱテモテ 4 章 17 節の続きは、こうなっています。「それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。」

2A 証しの力

1B 世にいながら神のもの

これでお分かりだと思います。主に遣わされ、証しをするために、主がともにおられるという約束があります。ですから、当たり前のことですが、そこは世であり、悪魔が支配している、神に反抗している世界です。しかし、そこに主がおられるのです。世にいながらにして、世に打ち勝つこと。世にいながらにして、神の支配の下にすること。これが、遣わされている使者の特徴です。

1C 異教の支配

ヨセフが連れて来られたところは、エジプトです。エジプトに行ったことがありますが、今でこそ、イスラム教の国ですが、当時は、多神教の国です。エジプトの神話に満ちた、神々の世界です。出エジプト記で、神が災いを下したものは、すべて神々として拝まれていました。ナイル川がおがまれ、かえるも拝まれ、空が暗くなりましたが、空も神としてあがめられていました。そして、死の宗

教なんですね。あのミイラが代表的ですが、死ぬというのは、死後の世界にただ移ることとみなされており、死者との交わりと言いますか、ともかく、イスラエルの神が生きている者の神に対して、かなり異質な宗教文化です。

2C キリストの勝利

そんなところにヨセフは、自分の意志に反して置かれています。神が、ここにおられるのか？と疑問に思ったら、いくらでも疑うことのできる要素はいっぱい、あります。それでも、主がおられたのです。主がおられるというのは、その環境がキリスト教のようなものだ、というものではありません。異教また世俗的であっても、そこに主が打ち勝っておられるのが、主がおられる証しなのです。

ヨセフに主がおられたことによって、何が起こったのでしょうか？「39:5 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。」エジプトの家、その財産すべてに祝福がありました。このように、目に見える形で、現れていました。異教徒であるエジプト人にとっても、ヨセフには神がおられると認められるかたちで、現れていました。

今でも思い出しますが、東アジア青年キリスト者大会において、元北朝鮮の人で、今は韓国に数人いる姉妹の証しがあります。彼女は、中国の朝鮮族のいるところに潜伏していました。朝鮮族の人が経営しているお店で働いていましたが、そこに韓国人のクリスチャンも働いていました。経営者は、とても酷く、彼女を取り扱いました。しかし、そのクリスチャンは、その人のことを悪態をつかず、むしろ耐え忍んで、その人のために祈っている姿を見たのです。北朝鮮からの脱北者である彼女は、無神論教育を受けていますから、神は信じていないのです。けれども、こんなことはあり得ないと思い、そのクリスチャンには神がいるのでは？と思ったのです。それが、彼女が後に信仰を持つきっかけになりました。神を信じない人にも、神がいるかも？と思わせたのです。

2B 世にある試み

主が共におられるということは、ヨセフを見ても、他の多くの人を見ても、世にある試みを免れることができる、ということではありません。むしろ、数多くの苦しみを経ていますね。ヨセフが、まさにそのことを証しています。

1C 兄弟からの反対

ヨセフは、兄たちに裏切られ、奴隷として売られました。仲間から裏切られるということは、とても辛いことです。主が共におられたモーセも、イスラエル人から多くの不平を聞いて行きました。ダビデは、なんと義父であるサウルから殺されそうになる人生を送りました。そして、私たちの主イエスは、同胞のユダヤ人から妬まれ、十字架刑に処せられたのです。

2C 罪への誘惑

そして、主が共におられることは、罪の誘惑がなくなることでは、全くありません。ヨセフは、主人のポティファルの妻から、寝ておくれと言われられました。エジプトの性についての倫理観は、ここでは語ることはできない、とてつもない低いものです。宗教と一体化されていました。そして、ヨセフは、だれもが淫らな行いをしている中で、主人の妻に言い寄られました。彼はまだ若いのです。とてつもない誘惑です。

3C 不正や中傷

そして、主がともにおられることは、世にある不正や中傷などから、免れることでもありません。ヨセフは、その妻の言いよりから逃げました。ところが、彼女はそれを逆に、ヨセフに自分が犯されそうになったという訴えに変えたのです。それで、彼は監獄に入れられました。

4C 落胆

ヨセフががっかりしなかったわけではありません。彼は、次の章 40 章で、自分がここに売られてきたのであり、また監獄に入るいわれはないことを訴えている場面があります。詩篇には、「105:18 ヨセフの足は苦しみのかせをはめられその首は鉄のかせに入れられた。」とありました。

3B 世への勝利

世からの悪いものを、受けなくて済むということが、主がともにおられる、しるしではありません。そのような悪の中にも、それでも守られ、勝利するというのが、しるしなのです。主が弟子たちを励まされました。「ヨハ 16:33 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」

1C 罪からの守り

ヨセフを見れば、ヨセフは、誘惑は受けましたが、その誘惑に打ち勝つ力が与えられました。もし、主が共におられなかったら、到底、そのようなことはできなかったでしょう。ユダの手紙には、神は私たちをつまずきから守る、と約束されています。「ユダ 24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる」。

2C 良い計画

そして、ヨセフに主が共におられるというのは、悪が行われても、それでも主がすべてを相働かせて、善としてくださることを知ることができる、ということです。ヨセフは最期に、兄たちに言いました。「50:20 あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました。それは今日のように、多くの人が生かされるためだったのです。」

悪いことが起こらないのではなく、悪いことまでが、主がご自分の計画で善にしまうということ

です。「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」

3C 苦しみにおける勝利

そして主が共におられるということのしるしは、たとえ苦しんでいても、自分が敗北しているように見えても、実は勝っているということです。イエスは、死を免れたのではなく、死なれました。それは敗北のように見えます。統一協会では、キリストの十字架は失敗だったと教えます。これは、悪魔からの偽りです。十字架という敗北のように見えるところから、よみがえられたのです。

パウロが、自分が敗北しているようにあって、実はよく見れば、そうっていないことをこう述べています。「Ⅱコリ 4:8-10 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」苦しみの中にあって、それでも勝利するところに、イエスのよみがえりのいのちが現れます。

4C 将来の栄光

そして、主が共におられるというのは、苦しみ、その後に栄光が来るという、キリストご自身の使命に、私たちがついて行くということです。「ロマ 8:17b 私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」ヨセフは、エジプトの宰相となりました。超大国において、イスラエルの神を信じる者が治めたのです。キリストご自身が、異邦人の間でも信じられ、ユダヤ人だけでなく全世界の王とされます。そこに連なって、私たちもまた、神の国を相続することになります。

私たちが、このことを苦しみの中においても証します。そこに、キリストのいのちが現れます。そして、最後にはキリストのいのちにおいて、支配するという将来、望みがあります。そのためにも、私たちは、自分がこの地上にいるのはキリストによって遣わされているからだという召しを知らないといけません。

I. THE RESULTS OF GOD BEING WITH HIM.

A. What it did not do.

1. Keep him from being hated by brothers.
2. Keep him from being sold as slave.
3. Keep him from most powerful temptation.
4. Keep him from false accusations.
5. Keep him from imprisonment.
 - a. "Whose feet they hurt with fetters, he was laid in iron."
 - b. Keep him from disappointment.

B. What it did do.

1. Kept him from sin.
2. Caused him to see adversity in a new light.
 - a. "You meant it for evil."
3. Gave him victory in all circumstances.
4. Caused him to reign.